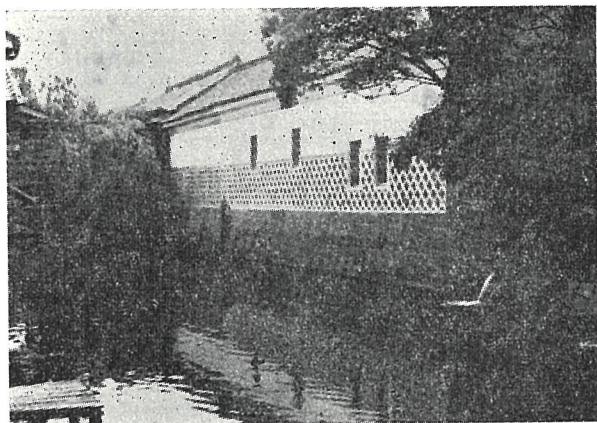




同志社

歴史散歩

柳川

加藤 延雄

柳川小史

同志社英学校第一回卒業生、第八代同志社総長海老名弾正先生は人の知る如く明治九年九月同志社に転入学の熊本バンドの一人であるが、その郷里は柳川である。

柳河は立花氏の城下町である。立花諸公中最高の人物は宗茂^{もとむね}であろう。彼は高橋紹運の子で立花道雪の養子となり武勇にすぐれた名将となった。秀吉の朝鮮征伐の折文禄の役に碧蹄館の戦で明の大軍を破つてその雄名は大陸にまで轟いた。秀吉も彼を高く評価して「東国に本多忠勝あり、鎮西に立花宗茂あり、ともに天下一双の勇士なり」といつている。しかし関ヶ原の戦では豊家に忠節を尽し西軍についたため家康にいらまれたが、蔚山で宗茂に救出された加藤清正のとりなしで所領没収のみで赦され、後に奥州白河棚倉に一万石の封を受けた。大阪の両役の武勲で柳河復帰が叶った。(十二万石)。爾後明治維新までその子孫が領主としてここを治めた。城は明治五年焼失した。城跡には今学校がある。

維新後、立花氏はこの地の産業特に農事の改良に力を入れ自邸の庭を農場として品種の

改良等に尽した。花卉も多く栽培したのでお花屋敷といわれ、戦後料亭に転じた折にはお花と称した。

水郷の風物

今の柳川市は昭和二十六年柳河町が附近五か村を合併して柳川町となり。翌年市制を置いて柳川市となった。人口約四万九千の小都市である。国鉄鹿兒島本線敷設に当り柳河の指導者達は反対したため発展は全く遅れ廃市とまでいわれたが、後に国鉄佐賀線、西鉄大牟田線が各柳川駅を設けてくれたのでやっと衰運をくい止めた。最近有明海底炭坑の企があり、その入口を柳川市沖端に設けることになって明るい希望が生じたが、炭界不振の昨今この案もどうなるかわからない。今日此地のプラスは水郷観光と水産業、農業位である。

柳河が一種独特の情趣をもつ水郷であることは周知の通りである。私の生家も柳川東郊三橋町高畑^{ミカハタケ}にあつて私も七年間ここで育つたのでその有様は少々記憶に存している。生家の庭前を矢部川の分流が豊かな水をたたえて邸内から斜に出た老柳の垂れた枝を洗わんば

柳川の同志社人

かりに市の方へ流れて行く。裏の堀ではすっぱんや鰻がよくとれた。邸前の川は城堀に、そしてクリークからクリークへと続いていて大がいの処は舟で行くことができる。私も子供の頃父が勤める伝習館に弁当を届けに母が棹さす舟に乗せてもらって学校へ横づけしたことや、上流本郷あたりへ水上ハイキング或は舟行ピクニックに行つたことも憶えている。陸を行くとかえつてその川この堀で行づまりになることもある。公設の橋の他に私設橋があつて有料で、渡り賃を取つた。チントリ橋といつた。多くの家が何らかの形で水に接していた。各戸毎に舟着場、水汲場、魚釣場を兼ねるクミザという小棧橋様の設備がある。飲料水も魚もその流から得られる。洗濯もここです。勿論交通路でもある。柳川人の生活はこんな流れを動脈として営まれる。柳川は有明海に近く矢部川の分流にはさまれたデルタ地帯で低平、水陸すれすれで洪水ともなるとすぐ一面の泥水の海と化するのである。山は遠かった。私が京都に来て珍らしくまたうれしく感じたことの一つは山をま近かに見得ることであつた。

海老名先生の郷里はこんな処であつた。彈正氏（一八五六―一九三七）は最初喜三郎といつて海老名休也の長男で藩校伝習館で漢学を主として学んだ。明治五年熊本洋学校に入りジュエンスの薰陶を受け花岡山の誓にも加わつた。同志社で新島先生の教育を受けた。同志社卒業後、安中教会を牧し、東京に出て本郷教会を創始し、明治二十年熊本に帰つて熊本英学校、熊本女学校を設立した。明治二十三年には京都に転じて組合派の伝道機関日本伝道会社の社長となつて教会の独立と自給をうながした。神戸教会牧師を経て再び本郷教会を牧し廿四年間つとめ、その間、彼の進歩的な思想を以て吉野作造小山東助、鈴木文治、内ヶ崎作三郎の如きすぐれた人物を育てた。大正九年同志社総長となり任にある事約九年、大に同志社の発展に力を尽した。男女共学も大に奨励した。熊本に学校を作るに当つても男女両方の学校を作つた。氏が熊本洋学校にいた頃、ある日二人の女子が出席した。これに憤慨した男学生は海老名を代表としてジュエンスに抗議した。反対論をきき終つた師

は代表に問うた「君は母を尊敬するか」答「然り」「君の母は男か女か」「女です」「では女学生をも尊敬しなさい」。この二人の女子の一人と後に海老名氏は結婚した。海老名氏は彼の母校伝習館を出て高等学校に学んでいた同郷の後輩加藤延年（一八六六―一九四五）をすすめて同志社普通学校に転校させた。海老名氏の曽祖父季知は加藤家から入つて海老名家を嗣いだ人であつた。延年は卒業後海老名氏に招かれて熊本英学校、同女学校で教えた（六年間）学校閉鎖後母校伝習館で四年間教えてから明治三十二年招かれて同志社に戻り昭和二十年歿するまで勤めた。

なお柳川出身の同志社人には大正・昭和にかけて同大教務の職にあつた児玉朔一郎氏や現在福岡大学の教授である田島宗人氏（昭和四年神学科卒）がある。また一時京都の不良学生共を摺伏せしめた快傑玉真吉郎氏（明治卅三年尋常中学校卒）がある。他にも当然挙げべき柳川同志社人もあろうが筆者は寡聞である。寛恕を乞ふ次第である。

色にして老木の柳うちしだる

我が柳川の水の豊けき（白秋）

（前中学校長・徳富文庫嘱託）